

犬と笛

芥川龍之介

青空文庫

いく子さんに献ず

一

昔、大和の国葛城山の麓に、髪長彦という若い木樵が住んでいました。これは顔かたちが女のようにやさしくつて、その上髪までも女のように長かったものですから、こういう名前をつけられていたのです。

髪長彦は、大そう笛が上手でしたから、山へ木を伐りに行く時でも、仕事の合い間合い間には、腰にさしている笛を出して、

独りでその音ねを楽しんでいました。するとまた不思議なことには、
どんな鳥とりけもの 獣くさぎ や草木でも、笛の面白さはわかるのでしよう。髪
長彦がそれを吹き出すと、草はなびき、木はそよぎ、鳥や獣はま
わりへ来て、じつとしまいまで聞いていました。

ところがある日のこと、髪長彦はいつもの通り、とある大木の
根がたに腰を卸しながら、余念もなく笛を吹いていますと、たち
まち自分の目の前へ、青いまがたま勾玉を沢山ぶらさげた、足の一本し
かない大男が現れて、

「お前は仲々笛がうまいな。己おれはずつと昔から山奥の洞穴ほらあなで、
神代かみよの夢ばかり見ていたが、お前が木を伐きりに来始めてからは、
その笛の音に誘われて、毎日面白い思をしていた。そこで今日は

そのお礼に、ここまでわざわざ来たのだから、何でも好きなものを望むが好い。」と言いました。

そこで木樵きこりは、しばらく考えていましたが、
「私わたくしは犬が好きですから、どうか犬を一匹下さい。」と答えました。

すると、大男は笑いながら、

「高が犬を一匹くれなどは、お前も余つ程欲のない男だ。しかしその欲のないのも感心だから、ほかにはまたとないような不思議な犬をくれてやろう。こう言う己おれは、葛城山かつらぎやまの足あしひと一つの神だ。」と言つて、一声高く口笛を鳴らしますと、森の奥から一匹の白犬が、落葉を蹴立てて駈かけて来ました。

足一つの神はその犬を指して、

「これは名を嗅げと言つて、どんな遠い所の事でも嗅ぎ出して来る利口な犬だ。では、一生己おれの代りに、大事に飼つてやつてくれ。」と言ふかと思うと、その姿は霧のように消えて、見えなくなつてしまいました。

髪長彦は大喜びで、この白犬と一しよに里へ歸つて来ましたが、あくる日また、山へ行つて、何気なく笛なげを鳴らしていると、今度は黒い勾まがたま玉を首へかけた、手の一本しかない大男が、どこからか形を現して、

「きのう己の兄きの足一つの神が、お前に犬をやつたそうだから、己も今日は礼をしようと思つてやつて来た。何か欲しいものがある

るのなら、遠慮なく言うが好い。己は葛城山の手てひと一つの神だ。」
と言いました。

そうして髪長彦が、また「嗅かげにも負けないような犬が欲しい
。」と答えますと、大男はすぐに口笛を吹いて、一匹の黒犬を呼
び出しながら、

「この犬の名は飛べと言つて、誰でも背中へ乗つてさえすれば百
里でも千里でも、空を飛んで行くことが出来る。明日あしたはまた己の
弟が、何かお前に礼をするだろう。」と言つて、前のようにどこ
かへ消え失せてしまいました。

するとあくる日は、まだ、笛を吹くか吹かないのに、赤い勾まがた
玉まを飾りにした、目の一つしかない大男が、風のように空から

舞い下つて、

「己おれは葛城山かつらぎやまの目一つめひとの神だ、兄きたちがお前に礼をしたそうだから、己も嗅げや飛べに劣らないような、立派な犬をくれてやろう。」と言つたと思うと、もう口笛の音が森中にひびき渡つて、一匹の斑ぶちいぬ犬が牙きばをむき出しながら、駈けて来ました。

「これは噛めという犬だ。この犬を相手にしたが最後、どんな恐おれしい鬼神おにがみでも、きつと一噛ひとかみに噛み殺されてしまう。ただ、己おれたちのやった犬は、どんな遠いところにいっても、お前が笛を吹きさえすれば、きつとそこへ歸つて来るが、笛がなければ来ないから、それを忘れずにいるが好い。」

そう言いながら目一つの神は、また森の木の葉をふるわせて、

風のように舞い上つてしまいました。

二

それから四五日たったある日のことです。髪長彦は三匹の犬をつれて、葛城山かつらぎやまの麓にある、路が三みつ又またになつた往来へ、笛を吹きながら来かかりますと、右と左と両方の路から、弓矢に身をかためた、二人の年若な侍が、遅たくましい馬に跨またつて、しずしずこつちへやつて来ました。

髪長彦はそれを見ると、吹いていた笛を腰へさして、叮嚀におじぎをしながら、

「もし、もし、殿様、あなた方は一体、どちらへいらつしやるの
 でございます。」と尋ねました。

すると二人の侍が、交る交る答えますには、

「今度飛鳥の大臣様の御姫様が御二方、どうやら鬼神のたぐ
 いにでもさらわれたと見えて、一晩の中に御行方が知れなくな
 った。」

「大臣様は大そうな御心配で、誰でも御姫様を探し出して来たも
 のには、厚い御褒美を下されると云う仰せだから、それで我々二人
 も、御行方を尋ねて歩いているのだ。」

こう云つて二人の侍は、女のような木樵と三匹の犬とをさも莫
 迦にしたように見下しながら、途を急いで行つてしまいました。

髪長彦は好い事を聞いたと思いましたが、早速白犬の頭を撫でて、

「嗅げ。嗅げ。御姫様たちの御行方を嗅ぎ出せ。」と云いました。すると白犬は、折から吹いて来た風に向つて、しきりに鼻をひこつかせていましたが、たちまち身ぶるいの一つするが早いか、「わん、わん、御姉様おあねえさまの御姫様は、生駒山いこまやまの洞穴ほらあなに住んでいる食蝨人しょくしんじんの虜とりこになっています。」と答えました。食蝨人しょくしんじんと云うのは、昔八岐やまたの大蛇おろちを飼っていた、途方もない悪者なのです。

そこで木樵きこりはすぐ白犬と斑犬ふちいぬとを、両方の側わきにかかえたまま、黒犬の背中に跨つて、大きな声でこう云いつけました。

「飛べ。飛べ。生駒山いこまやまの洞穴ほらあなに住んでいる食蜃人の所へ飛んで行け。」

その言ことばが終らない中うちです。恐しいつむじ風が、髪長彦の足の下から吹き起ったと思いますと、まるで一ひらの木の葉このように、見る見る黒犬は空へ舞い上つて、青雲あおぐもの向うにかくれている、遠い生駒山の峰の方へ、真一文字に飛び始めました。

三

やがて髪長彦かみなながひこが生駒山いこまやまへ来て見ますと、成程山の中程に大きな洞穴ほらあなが一つあつて、その中に金の櫛くしをさした、綺麗きれいな御おひめ

姫さま様が一人、しくしく泣いていらつしやいました。

「御姫様、御姫様、私わたくしが御迎えにまいりましたから、もう御心配には及びません。さあ、早く、御父おとうさま様の所へ御帰りになる御仕度をなすつて下さいまし。」

こう髪長彦が云いますと、三匹の犬も御姫様の裾や袖を啣くわえながら、

「さあ早く、御仕度をなすつて下さいまし。わん、わん、わん、」と吠えました。

しかし御姫様は、まだ御眼に涙をためながら、洞穴の奥の方をそつと指さして御見せになつて、

「それでもあすこには、私わたしをさらつて来た食虻人が、さつきから

御酒に酔って寝ています。あれが目をさましたら、すぐに追いかけて来るでしょう。そうすると、あなたも私も、命をとられてしまうのにながいありません。」と仰おっしゃ有あいました。

髪長彦はにつこりほほ笑んで、

「高の知れた食虻人などを、何でこの私が怖わたくしこわがりましょう。その証拠には、今ここで、訳わけなく私が退治して御覧に入れます。」と云いながら、斑ぶちいぬ犬の背中を一つたたいて、

「噛め。噛め。この洞穴の奥にいる食虻人を一噛みに噛み殺せ。」と、勇ましい声で云いつけました。

すると斑犬はすぐ牙きばをむき出して、雷かみなりのように唸うなりながら、まっしぐらに洞穴の中へとびこみましたが、たちまちの中にまた血

だらけな食蜃人の首を啣くわえたまま、尾をふって外へ出て来ました。ところが不思議な事には、それと同時に、雲で埋うづまっている谷底から、一陣の風がまき起りますと、その風の中に何かいて、「髪長彦さん。難ありがと有う。この御恩は忘れません。私は食蜃人にいじめられていた、生駒山の駒こまひめ姫です。」と、やさしい声で云いました。

しかし御姫様は、命拾いをなすつた嬉しさに、この声も聞えなような御容ごようす子でしたが、やがて髪長彦の方を向いて、心配そうに仰おっしゃ有やいますには、
 「私わたくしはあなたのおかげで命拾いをしましたが、妹は今時分どこでどんな目に逢あつて居りましょう。」

髪長彦はこれを聞くと、また白犬の頭を撫なでながら、

「嗅げ。嗅げ。御姫様の御行方を嗅ぎ出せ。」と云いました。と、
すぐに白犬は、

「わん、わん、御おいもとご妹様の御姫様は笠置山かさぎやまの洞穴ほらあなに棲すんで
いる土蜘蛛つちぐもの虜とりこになっています。」と、主人の顔を見上げながら、

鼻をびくつかせて答えました。この土蜘蛛と云うのは、昔神武じんむて
天皇んのう様が御征伐になった事のある、一寸法師いっすんぼうしの悪者なのです。

そこで髪長彦は、前のように二匹の犬を小脇こわきにかかえて御姫様
と一しよに黒犬の背中へ跨りながら、

「飛べ。飛べ。笠置山の洞穴に住んでいる土蜘蛛の所へ飛んで行
け。」と云いますと、黒犬はたちまち空へ飛び上って、これも青

雲のたなびく中に聳えている笠置山へ矢よりも早く駈け始めました。

四

さて笠置山へ着きますと、ここにいる土蜘蛛はいたって悪知わるちちえのあるやつでしたから、髪長彦かみながひこの姿を見るが早いか、わざとにここにご笑いながら、洞穴ほらあなの前まで迎えに出て、

「これは、これは、髪長彦さん。遠方御苦労でございました。まあ、こつちへおはいりなさい。碌ろくなものはありませんが、せめて鹿の生胆いきぎもか熊の孕はらみご子こでも御馳走ごちそうしましょう。」と云いました。

しかし髪長彦は首をふって、

「いや、いや、己おれはお前がさらって来た御姫様をとり返しにやつて来たのだ。早く御姫様を返せばよし、さもなければあの食しよく蜃しん人んじん同様、殺してしまうからそう思え。」と、恐しい勢いで叱りつけました。

すると土蜘蛛は、一ちぢみにちぢみ上つて、

「ああ、御返し申しますとも、何でああなたの仰おっしゃ有る事に、いやだなどと申しましょう。御姫様はこの奥にちやんと、独りでいらつしやいます。どうか御遠慮なく中へはいつて、御つれになつて下さいまし。」と、声をふるわせながら云いました。

そこで髪長彦は、御姉様の御姫様と三匹の犬とをつれて、洞穴

の中へはいりますと、成程ここにも銀の櫛くしをさした、可愛らしい御姫様が、悲しそうにしくしく泣いています。

それが人の来た容子ようすに驚いて、急いでこちらを御覧になりましたが、御姉様おあねさまの御顔を一目見たと思うと、

「御姉様。」

「妹。」と、二人の御姫様は一度に両方から駈けよつて、暫くは互に抱だき合つたまま、うれし涙にくれていらつしやいました。髪長彦もこの気色けしきを見て、貰い泣きをしていましたが、急に三匹の犬が背中の毛を逆立さかだてて、

「わん。わん。土蜘蛛つちぐもの畜生め。」

「憎いやつだ。わん。わん。」

「わん。わん。わん。覚えていろ。わん。わん。わん。」と、氣の違つたように吠え出しましたから、ふと氣がついてふり返えると、あの狡猾こうかつな土蜘蛛は、いつどうしたのか、大きな岩で、一分の隙すきもないように、外から洞穴の入口をぴったりふさいでしまいました。おまけにその岩の向うでは、

「ざまを見る、髪長彦め。こうして置けば、貴様たちは、一月とたたない中に、ひぼしになつて死んでしまうぞ。何と己おれさま様の計略は、恐れ入つたものだろう。」と、手を拍たたいて土蜘蛛の笑う声がしています。

これにはさすがの髪長彦も、さては一ぱい食わされたかと、一時は口惜しがりましたが、幸い思い出したのは、腰にさしていた

笛の事です。この笛を吹きさえすれば、とりけもの鳥獣は云うまでもなく、くさき草木もうつとり聞き惚ほれるのですから、あのこつかつ狡猾な土蜘蛛も、心を動かさないとはいりません。そこで髪長彦は勇気を取り直して、吠えたける犬をなだめながら、一心不乱に笛を吹き出しました。

するとその音色ねいろの面白さには、悪者の土蜘蛛も、追々おいおい我を忘れたのでしよう。始は洞穴の入口に耳をつけて、じつと聞き澄ましていましたが、とうとうしまいには夢中になって、一寸二寸と大岩を、少しずつ側わきへ開きはじめました。

それが人一人通れるくらい、大きな口をあいた時です。髪長彦は急に笛をやめて、

「噛め。噛め。洞穴の入口に立っている土蜘蛛を噛み殺せ。」と、斑ぶちいぬ犬の背中をたたいて、云いつけました。

この声に胆をつぶして、一目散に土蜘蛛は、逃げ出そうとしましたが、もうその時は間に合いません。「噛め」はまるで電いなずまのように、洞穴の外へ飛び出して、何の苦もなく土蜘蛛を噛み殺してしまいました。

所がまた不思議な事には、それと同時に谷底から、一陣の風が吹き起つて、

「髪長彦さん。難ありがと有う。この御恩は忘れません。私わたしは土蜘蛛にいじめられていた、笠置山かさぎやまの笠姫かさひめです。」とやさしい声が聞えました。

五

それから髪長彦かみなながひこは、二人の御姫様と三匹の犬とをひきつれて、黒犬の背に跨がりながら、笠置山かさぎやまの頂から、飛鳥あすかの大臣様おおおみさまの御出になる都の方へまっすぐに、空を飛んでまいりました。その途中で二人の御姫様は、どう御思いになったのか、御自分たちの金の櫛と銀の櫛とをぬきとって、それを髪長彦の長い髪へそつとさして御置きになりました。が、こつちは元よりそんな事には、気がつく筈がありません。ただ、一生懸命に黒犬を急がせながら、美しい大和やまとの国原くにはらを足の下に見下して、ずんずん空を飛んで行

きました。

その中に髪長彦は、あの始めに通りかかった、三つ又またの路の空まで、犬を進めて来ましたが、見るとそこにはさっきの二人の侍が、どこからかの帰りと見えて、また馬を並べながら、都の方へ急いでいます。これを見ると、髪長彦は、ふと自分の大手柄を、この二人の侍たちにも聞かせたいと云う心もちが起つて来たものですから、

「下りろ。下りろ。あの三つ又またになっている路の上へ下りて行け。」と、こう黒犬に云いつけました。

こつちは二人の侍です。折角方々探しまわったのに、御姫様たちの御行方がどうしても知れないので、しおしお馬を進めている

と、いきなりその御姫様たちが、女のような木樵きこりと一しよに、逞たくましい黒犬に跨またつて、空から舞い下くだつて来たのですから、その驚きと云いつたらありません。

髪長彦は犬の背中を下くだりると、叮嚀ていれいにまたおじぎをして、

「殿様わたたくし、私はあなた方に御別れ申まをしてから、すぐに生駒山いこまやまと笠かさ

置山さぎやまとへ飛とんで行いつて、この通り御二方の御姫様を御助け申まをしてまいりました。」と云いいました。

しかし二人の侍は、こんな卑ひしい木樵きこりなどに、まんまと鼻をあかさされたのですから、羨うらやましいのと、妬ねたましいのとで、腹が立つて仕方がありません。そこで上辺うわべはさも嬉うれしそうに、いろいろ髪長彦の手柄てを褒ほめ立てながら、とうとう三匹の犬の由来や、腰こしにさ

した笛の不思議などをすっかり聞き出してしまいました。そうして髪長彦の油断をしている中に、まず大事な笛をそつと腰からぬいてしまうと、二人はいきなり黒犬の背中へとび乗って、二人の御姫様と二匹の犬とを、しつかりと両脇に抱えながら、

「飛べ。飛べ。飛鳥あすかの大臣様おおおみさまのいらつしやる、都の方へ飛んで行け。」と、声を揃えて喚わめきました。

髪長彦は驚いて、すぐに二人へとびかかりましたが、もうその時には大風が吹き起つて、侍たちを乗せた黒犬は、きりりと尾を捲まいたまま、遙な青空の上の方へ舞い上つて行ってしまいました。

あとにはただ、侍たちの乗りすてた二匹の馬が残っているばかりですから、髪長彦は三つ又になった往来のまん中につつぷして、

しばらくはただ悲しそうにおいおい泣いておりました。

すると生駒山いこまやまの峰の方から、さつと風が吹いて来たと思いま
すと、その風の中に声がして、

「髪長彦さん。髪長彦さん。私わたしは生駒山こまひめの駒姫こまひめです。」と、や
さしい囁ささやきが聞えました。

それと同時にまた笠置山かさぎやまの方からも、さつと風が渡るや否や、
やはりその風の中にも声があつて、

「髪長彦さん。髪長彦さん。私わたしは笠置山かさぎやまの笠姫かさひめです。」と、こ
れもやさしく囁ささやきました。

そうしてその声が一つになつて、

「これからすぐに私わたしたちは、あの侍あつたちの後を追つて、笛をとり

返して上げますから、少しも御心配なさいますな。」と云うか云わないうちの中に、風はびゆうびゆう唸りながら、さつき黒犬の飛んで行つた方へ、狂つて行つてしまいました。

が、少したつとその風は、またこの三つ又またになつた路の上へ、前のようにやさしく囁きながら、高い空から下おろして来ました。

「あの二人の侍たちは、もう御二方の御姫様と一しよに、飛鳥あすかのおおおみさま大臣様の前へ出て、いろいろ御褒美ごほうびを頂いています。さあ、さあ、早くこの笛を吹いて、三匹の犬をここへ御呼びなさい。その間に私あいだたちは、あなたが御出世の旅立を、恥しくないようにして上げましょう。」

こう云う声がしたかと思うと、あの大事な笛を始め、金の鎧よろいだ

の、銀の兜かぶとだの、孔雀くじやくの羽の矢だの、香木かうぼくの弓だの、立派な
 大将の装いが、まるで雨あられか霰あられのように、眩まぶしく日に輝きながら、
 ばらばら眼の前へ降って来ました。

六

それからしばらくたつて、香木の弓に孔雀の羽の矢を背しよ負つた、
 神様のような髪かみ長彦ながひこが、黒犬の背中に跨りながら、白と斑ふちと二
 匹の犬を小脇にかかえて、飛鳥あすかの大臣おほおみさま様の御館おやかたへ、空から舞
 い下つて来た時には、あの二人の年若な侍たちが、どんなに慌て
 騒さわぎましたろう。

いや、大臣様でさえ、あまりの不思議に御驚きになって、暫くはまるで夢のように、髪長彦の凜々りりしい姿を、ぼんやり眺めていらつしやいました。

が、髪長彦はまず兜かぶとをぬいで、叮嚀に大臣様に御じぎをしなから、

「私わたくしはこの国の葛城山かつらぎやまの麓に住んでいる、髪長彦と申すものでございませう、御二方の御姫様を御助け申したのは私で、そこにおります御侍たちは、食しょく蜃人しんじんや土蜘蛛つちぐもを退治するのに、指一本でも御動かしになりは致しません。」と申し上げました。

これを聞いた侍たちは、何しろ今までは髪長彦の話した事を、さも自分たちの手柄らしく吹聴していたのですから、二人とも急

に顔色を変えて、相手の言を遮りながら、

「これはまた思いもよらない嘘をつくやつでございます。食蜃人の首を斬ったのも私たちなら、土蜘蛛の計略を見やぶったのも、私たちに相違ございません。」と、誠にやかに申し上げました。

そこでまん中に立った大臣様は、どちらの云う事がほんとうとも、見きわめが御つきにならないので、侍たちと髪長彦を御見比べなさりながら、

「これはお前たちに聞いて見るよりほかはない。一体お前たちを助けたのは、どっちの男だったと思う。」と、御姫様たちの方を向いて、仰おっしや有あいました。

すると二人の御姫様は、一度に御父様の胸に御すがりになりな

がら、

「わたし私たちを助けましたのは、髪長彦でございます。その証拠には、あの男のふさふさした長い髪に、私たちの櫛をさして置きましたから、どうかそれを御覧下さいまし。」と、恥しそうに御云いになりました。見ると成程、髪長彦の頭には、金の櫛と銀の櫛とが、美しくきらきら光っています。

もうこうなつては侍たちも、ほかに仕方はございませんから、とうとう大臣様の前にひれ伏して、

「わたし実は私たちが悪だくみで、あの髪長彦の助けた御姫様を、私たちの手柄のように、ここでは申し上げたのでございます。この通り白状致しました上は、どうか命ばかりは御助け下さいまし。」

と、がたがたふるえながら申し上げました。

それから先の事は、別に御話しするまでもありません。髪長彦は沢山御褒美を頂いただいた上に、飛鳥あすかの大臣様の御婿おむこさま様になりましたし、二人の若い侍たちは、三匹の犬に追いまわされて、ほうほう御館おやかたの外へ逃げ出してしまいました。ただ、どちらの御姫様が、髪長彦の御嫁さんになりましたか、それだけは何分昔の事で、今でははっきりとわかっておりません。

(大正七年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月7日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬と笛

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>